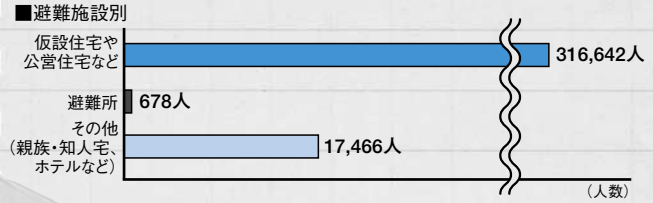
忘れないで。3.11

昨年3月11日に発生した東日本大震災から、まもなく1年。
地震と津波、そして原発事故によって瞬時に奪われた日常を、今なお取り戻せずに苦しむ被災者が数多くいます。
ここでは、そうした方々を被災地や市内で支援する市民活動団体へインタビュー。
活動の現状や、被災者を支えるために必要なことをお伝えするとともに、
被災者支援の活動をみんなで支える仕組みを紹介します。

被災者の状況

全国の避難者数 334,786人（昨年12/15現在）
※東日本大震災復興対策本部事務局調べ



札幌市への避難者数 1,420人（1/16現在）
※うち、公的住宅入居者は1,038人。その他は市の把握分のみ算入

被災地で支援

人口流出が止まらない被災地。地域の暮らしを立て直したい。

震災直後の3月13日には、津波で甚大な被害を受けた岩手県釜石市に駆け付けたNPO法人「ねおす」。以後、釜石市を拠点に、地元の方々、ボランティアと共に復興支援活動を続けています。

ワカメの種付けをしたロープを海に沈めるための土のうを作る、職員とボランティア。

NPO法人ねおす代表
高木（たかぎ） 晴光（はるみつ）さん

自然体験活動を行うNPO法人ねおすを1999年に設立。札幌や黒松内などを拠点に、農山漁村と都市との交流事業にも取り組む。

―震災2日後には被災地に入ったそうですね。

はい。釜石市に実家のある職員がいたため、翌日にはその職員と一緒に被災地に向かいました。ワゴン車に食料や毛布を詰め込んで現地に入りましたが、津波で壊滅状態でした。

―どのような支援活動をしたのですか。

当初は物資不足が深刻で、ワゴン車3台で燃料や下着などを何度も運びました。避難所生活が続いていた時は、出張フリーマーケットや炊き出し、がれきの撤去を行ったほか、子どもの遊び場づくりや、高齢者に農家の手料理を振る舞う活動などを行いました。

―今、被災者の一番の課題は。

家も仕事も失い、失業保険が切れる中、生活の再建が急務です。釜石では、市内での再起を諦め約3千人が転出したといわれます。

―漁業や起業の支援にも取り組んでいますね。

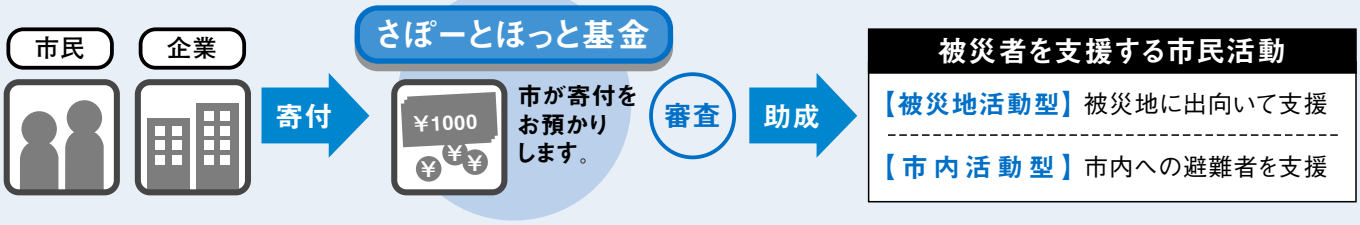
9月には、ワカメ養殖の再開を目指し、漁師やボランティアと3万個の土のうを作り、海に沈めました。今は地域の食堂を作ろうと、メニュー作りなどのお手伝いをしています。地元の人は、私たちのような外の人間の支援を積極的に受け入れ、立ち上がろうと懸命で、その姿から、人の強さやつながりの大切さを学ばせてもらっています。

―皆さんに一番伝えたいことは。

とにかく現地に行き、被災地を見てほしい。津波を受けた街は今も想像を絶する光景です。そうした中、飲食店や旅館などが徐々に再開し始めました。閑散とした街に観光客が戻って、経済が動き出せば、復興のきっかけになります。

被災者支援の活動を応援する仕組みがあります。

さぽーとほっと基金
市民の皆さんからの寄付をもとに、市民活動団体によるまちづくり活動に助成を行い、活動を支援する制度です。



■「被災者支援」を指定して寄付できます

寄付の際に、使い道を指定できます。昨年4月から、福祉・環境など17の「分野」や「団体」指定などに加えて、「被災者を支援する市民活動」を指定した寄付を受け付けています。

■多くの支援活動に役立てられています

これまでに被災者支援を指定した寄付金額は、合計約1,173万円（71件）。市が活動の緊急性などを審査し、これまで14の被災者支援活動に約946万円を助成しています。

寄付で、被災者支援を応援しませんか

1.被災者支援活動応援口座への振込 …… 手軽に寄付できる

指定銀行の窓口、ATMから振り込みができます。
指定銀行 ①北洋銀行札幌市役所支店（普）〔口座番号〕3209345
②北海道銀行本店営業部（普）〔口座番号〕1759090
名義 ささえる会 被災者支援活動応援口座 代表 鈴木（すずき） 克典（かつのり）

2.寄付申出書による手続き …… 税の優遇を受けられる

下記で配布している申出書を提出。その後送付される納付書を使い、銀行などで振り込みます。個人の方は所得税と住民税が軽減され、法人は全額損金算入が可能です。
申出書の配布・提出場所 市役所13階市民活動促進担当
※申出書は下記のホームページからもダウンロードできます

「さぽーとほっと基金」に関するお問い合わせは、市民活動促進担当☎211-2964へ
ホームページでも詳しい情報をご覧になれます　www.city.sapporo.jp/shimin/support/kikin/shien.html

市内で避難者を支援

いつ故郷に帰れるか。募る不安を少しでも和らげたい。

昨年4月、道内に避難している被災者自身が結成した「みちのく会」。避難者同士の情報交換の場として、また避難者と支援者・行政をつなぐ橋渡し役として活動しています。

茶話会の様子。札幌に避難してきて、ここで初めて頼れる仲間に出会うことも多い。

みちのく会会長
本間（ほんま） 紀伊子（きいこ）さん

9年前から夫と息子3人で宮城県川崎町で生活。昨年3月末、家族と一緒に実家のある札幌に避難した。

―活動のきっかけを教えてください。

私自身、原発事故の情報が全然入らない状況に耐えかね、3月末に宮城県から避難してきました。4月に行われた避難者支援のイベントで、多くの避難者に出会い、不安や悩みを共有できる横のつながりが必要と痛感。そこで知り合った12世帯で会を結成しました。

―どのような支援活動をしていますか。

会報やホームページで、避難者や移住希望者に市内の生活情報を発信しています。また、毎週木曜日に避難者が気軽に集える茶話会を開催。会員が700人を超え、会報の送付などの経費がかさむ一方、寄付などの活動資金は減少し、資金不足が深刻になっています。

―札幌への避難者はどんな方が多いのですか。

福島県からの避難者が大半で、やはり原発事故の影響を心配する母子が多いです。札幌を選ぶ理由は、福島から遠いことと、安全な道産食材が豊富なこと。海を越える分、永住を考えた強い決心で避難してくる人が多いですね。

―皆さんに一番伝えたいことは。

仕事の都合で夫は被災地という、二重生活を続ける避難者も多く、経済的・精神的に追い込まれています。さらにその苦境の出口は見えません。学校の年度替わりを待って、この春避難してくる親子も多いのではないかと思います。故郷や当たり前の日常を捨てざるを得なかった人たちに、札幌で少しでも安心して暮らしてほしい。支援はまだまだこれから必要なのです。